

## 最優秀賞

いのち輝く未来はわかやまから

和歌山県立桐蔭高等学校 一年

川端 琴羽

大阪・関西万博の会場に足を踏み入れた瞬間、目の前に広がる光景は、未来の断片を集めた巨大なパズルのようだった。各国が競い合うように展示する最先端技術や持続可能な社会を目指す多様な取り組みは、単なるSDGの世界ではなく、私たちが数年後に直面する現実なのだと理解させられた。万博が提示する「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマは、華やかさと同時にその実現に向けた膨大な課題を突きつけているようにも感じられた。

万博で見た「空飛ぶクルマ」は、モビリティの未来を象徴していた。それを故郷の和歌山と重ね合わせたとき、過疎化が進む中山間地域における交通インフラの未来が頭をよぎった。高齢者が買い物や通院に苦労する現状に対し、万博の技術は単なる夢物語ではなく、現実的な解決策となり得るのではないか。一方で、デジタル技術は、都市部との情報格差や孤立しがちな高齢者の生活をどう豊かにしていくかという、より深い問いを投げかけてきた。私たちには、これらの技術をただ享受するだけでなく、地域に根差した形で実装していく知恵が求められている。

和歌山が誇る豊かな自然も、万博で新たな視点を得た。紀の川や万葉歌にも詠まれた和歌の浦は、先人たちが「いのち」を慈しんできた場所だ。万博で示されたSDGsの理念は、この自然を次世代にどう受け継ぐかを考える上で不可欠な視点を与えてくれた。例えば、スマート農業と自然農法を融合させ、環境負荷を最小限に抑えつつ、和歌山が誇る高品質な産物を世界に発信する。食と自然が共生する新しいライフスタイルを和歌山から発信できれば、万博で見た未来の食卓がこの地で実現する

かもしれない。

さらに、万博で得た多様性への気づきは、和歌山の地域コミュニティを再構築するヒントになった。人口減少が進む和歌山では、高齢者、外国人、若者など多様な人々が協働していくことが不可欠だ。万博では、多様な価値観が尊重され、新しいアイデアが生まれる「共創」の場が広がっていた。和歌山でも、高校生が主体となって地域の課題解決に取り組む「高校生未来会議」のような活動をさらに発展させ、地域住民や行政、企業を巻き込みながら、多様な人々が活躍できる地域社会を創り出せるはずだ。

万博は、私たち高校生に「未来は与えられるものではなく、自分たちの手で創り出すものだ」という強力なメッセージを突きつけた。和歌山の未来は、決して与えられた現実の延長線上にあるのではない。万博で得た学びと感動を胸に、私たちは故郷の課題を直視し、自分たちの力で未来をデザインしていく覚悟を持たなければならない。それは、華やかなイベントが終わった後も、学び続け、行動し続けることでしか実現できないのだから。